

## △三井寺▽成立の時代

三宅晶子

△三井寺▽は「世阿弥周辺の習作時代の作

品」(伊藤正義氏『新潮日本古典文学集成、謡曲集下』各曲解題)などと、世阿弥の作品に比してあまり完成度の高くない曲という評価が多いようである。しかし室町時代から頻繁に上演され、現代も名作の誉れ高い人気曲である。金春禪竹は『歌舞髓能記』に「正花風」として収め、音阿弥は寛正五年(一四六四)の糺河原の勸進猿樂第一日目の演目に選んでいることも、当時の評価の高さを表している。現代、欠点とされることの多い「思いの欠如」「拡散的な詞章」という面の検討を中心に、△三井寺▽の再評価を試みたい。

△三井寺▽をはかりごとの狂いとする考え方は室町末期の伝書に多く見られるが、実際のところ△三井寺▽は、思い故の狂乱があるはずのない設定になっている。前場の清水参籠の場面は、極めて正常な女人が我が子の行方を知るために一心に祈る姿が描かれていて、夢の告げを得て三井寺まで行くには、一日

あれば十分であろう。多くの物狂能のシテの

ように、長い道中の生活のために物狂いになる必要はないのである。しかも我が子の居場所はわかったのだから、それが原因で狂乱するはずはない。狂乱の体は我が子と再会するための手段で、目立つことつまり鐘撞く必要があったからである。十段の出会いの場面で「親子に逢ふはなにゆゑぞ、この鐘の声立てて、物狂ひのあるぞとて、お咎めありしゆゑなれば」と述べていることから、「意図的な物狂い」という設定が、作者自身にあったといつてよからう。曲舞も、物狂いのまねをしてその芸能を見せるわけだから、古歌などを引いておもしろく歌えば良い。霊夢で子の行方知るといふ特殊な設定によって、実は思ひとは無関係な新しい思い故の物狂能が出来たといつてもよからう。室町末期伝書の伝える考え方は、正鵠を射ていることになる。△三井寺▽以前にこういう設定で作られた物狂能は存在しないであろう。室町末期伝書では

△花筐▽などもはかりごとの狂乱に入れているが、世阿弥はそういうつもりで作っているわけではない。世阿弥は思いと狂乱と芸能とが一体化したおもしろさを物狂能において追及しており、△班女▽はその最も成功した例であろう。△桜川▽は一体化が不十分なため、母の思いにしては遊狂性が勝ち過ぎた焦点のぼけた作柄になっている。一方思いと狂乱と芸能の一体化を目指さない物狂態がある。すなわち元雅の△歌占・弱法師▽などがそれである。これらは、三者を別々に扱いつながら、全体として統一が取れた能に仕上がっている。実は△三井寺▽も思いと狂乱と芸能の分離を行っている点でそれらと同様であり、物狂能の系譜の中で同じような方向性を示していると言えるのではなからうか。

△三井寺▽の筋書き上の工夫は、思いの扱ひのみではない。たとえば、子供の失踪原因(人商人の誘拐)が一〇段の出会いの場面ですうやく明らかになる。故郷が清見が関であることも、七段で少し触れるだけで、これも出会いの場で明らかになる。物狂能には△桜川▽のように出身地が三度も繰り返されるといふような、状況説明を何度も繰り返すために劇的效果をそぐといった筋書きの未整理さや欠陥の目立つ曲が多いが、△三井寺▽は非常に洗練された筋書き処理がなされており、これ

も元雅の物狂能と共通する点である。

元雅の傾向は曲の設定や構成面ばかりでなく、詞章面にもうかがえる。△三井寺▽の詞章は前述のごとくあまり評価が高くないが、世阿弥風の、思いを本意に当てるべき思い故の物狂能の詞章にこだわらなければ、違った評価も可能であろう。全体に、耳近な詩歌をほとんどそのままのかたちで引き、その詩歌の持ち味を十分生かして、さらに歌の内容を補足するような説明を入れて、平明さを心がける。また鐘尽くしの曲舞は、山寺の春の夕暮れ・後朝・待つ宵など色々な場での鐘の音を耳慣れた詩歌の助けを借りて描き、様々な鐘のイメージから喚起される情緒が触れ合っていて、一つの世界が広がる。詩歌を中心にして、統一された美的情景を描出するよう意図されているのである。それは以下の段でも同様である。後シテ登場の五段は、花の春を想起させるような素材を多用して、春との対比の中から秋の情景を描く。続く六段は、漢詩・和歌・発句などを中心に、琵琶湖周辺の歌枕を讀み込みつつ、琵琶湖の秋の月の美しさを耽美的に描き出す。このように五段と六段は同じ琵琶湖の秋を描きながら、違った美しさを見せており、素材の選択をも含めて意図的に表現を変えていると言つてよからう。八段の鐘の段は、鐘の音が涅槃経の偈に譬えられ

ンギ形式の哥で表現されており、宗教的な素材をうまく使つて見せ場を作っている。以上のように適切な素材選択と、それを利用した平明な表現によつて、場面ごとに個性的で統一された世界を構築する手法は、△隅田川▽の都鳥の段や△盛久▽の道行をはじめ、元雅の作詞上の特色の一つである。

△三井寺▽は狂乱をよそおうといった新しい着眼点で自由に作られた物狂能である。世阿弥のそれが、思いと狂乱が重なり合い、縁語・掛詞などの多用による粘り強い作詞によつて、濃密な世界を作り出しているのに対し、△三井寺▽は秋の月夜と鐘の音の織り成す、美しく軽やかな、しかもしっとりとした情緒の世界を表現している。母の思いが狂乱という形で表現されていないことを、新しい物狂能の形として理解すれば、この曲は非常に合理的で洗練された、美しい物狂能として仕上がっていることがわかる。

元雅の物狂能や△蟬丸▽など、世阿弥による物狂能の定型確立後の作品には、新しい着想で作られた秀作がある。そのような曲の一つが、△三井寺▽であろう。元雅の要素の多い点に関しては、一応時代的傾向として大きくとらえておき、元雅の時代の特徴を示す作品であることを指摘するに止どめたい。